

---

ennui

穩田

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

e n n u i

### 【コード】

N 7 3 4 6 L

### 【作者名】

穩田

### 【あらすじ】

アンニユイなかんじ。

## 異論を言えば

その日は身体にまとわりつくような雨が朝からずっと降っていた。街の真ん中には大きな公園が誇らしげに幅を取り、その周りに集うようにして商店が立ち並んでいる。公園は街の名をとってマジル公園と呼ばれていた。公園内には木々が規則正しく並び、その中央では地下から汲み上げた水が噴水から噴き出している。晴れた日には噴水は待ち合わせに使われたり子どもたちの遊び場になっていた。しかし今日はあいにくの大雨だ。台風と国営気象所の予報士が告げずとも、それは空を見れば一目瞭然だった。なので その日が祝日だということも少なからず関係しているが、外を出歩く人の数はいつももの半分もいなかった。

街の通りは公園を元として馬車の車輪のように四方八方に行く手を広げている。その一つ、とりわけ人通りが少ない通りに一組の親子が仲良く傘を並べて歩いていた。二人とも髪は太陽に照らされた土のように明るい茶色をしている。肌は雪のように白くきめ細かい。母親の柔らかく微笑む口元には愛嬌があり、よく似た娘の表情には無邪気な笑みが浮かんでいた。

娘はフリルがふんだんに使われた黒のワンピースで足元は新品の黄色い長靴である。傍らの母親は装飾は控えめだがやはり黒のワンピースでパンプスさえも真っ黒だ。傘を持っていないほうの手には大きめの紙袋を抱えている。

水溜まりに足を突っこんだ娘は、爪先で蹴った水滴の行方を不思議そうに見つめた。彼女が手に持った薄いピンクの傘が大粒の雨を鍵盤を叩くように跳ね返す。綺麗だね、と少女は隣を歩いている母親に言った。彼女ははしゃいでいた。

雨の日はいつもこうだと母親は仕方なさそうに肩をすくめる。幼い娘にとっては些細なことさえも大事件なのだ。とりわけ雨の日は晴れの日より格段に少ない。母親には娘が特別な日だと喜ぶのもわ

からないではなかった。

それに、確かに特別な日だというのは間違っていない。今日は母親にとって、人生のうちでも特に大切な日だった。

親子が歩き続けていると雨が傘を叩く強さが増した。予報によると雨は明日の朝まで続くようだ。昼間には洗濯物を干すのにちょうどいい陽気になるはずだと母親は頼りなくついてくる娘を後目に胸を撫で下ろした。娘はまだ小さいが一番上の息子はもう二十歳に近い。

母親が子どもを産んだのが周りより随分早かったため、一番上と下の年齢差は十五も離れていた。後から結婚した同年代の知り合いにはまだ子どもがいない者もいる。

さらには上と下の真ん中に息子が二人いる。兄妹のなかで末っ子だけが女の子だった。四人もいるのだから一人くらいおとなしい子がいていいものだが、四人は四人とも外で泥塗れになるまで遊ぶのを好む気質がある。そのため洗濯物の量も人数の倍だ。一日でも雨が降ると洗う物は一度では洗いきれないほどになる。

大変だ忙しいと言いつつもそれが幸せなことだと母親は誰よりも知っていた。子どもたちは皆、年相応に泣いたり笑ったりと目まぐるしく表情を変える。見ていて一向に飽きることはない子どもたちの成長は母親が最も幸せだと感じるときだ。

雨はバラバラと降り注ぐ。母親はふいに傘の下から天を仰いだ。

空には太陽を覆い尽くした灰色の雲が広がっている。なぜか、世界で一人きりのような錯覚が胸を過る。母親は一つ身震いして娘に目を向けた。

足元は捌けが悪い土地柄のせいで街の中心に行くほど小川のようになってしまうている。娘はそれに足をとられそうになりながら、なんとか母親についてきていた。長く歩いた疲れから少女は母親に向かつて不満そうに唇を尖らせる。もう少しで着くからと母親は困ったように娘を宥めた。

親子の目的地は公園だ。家に帰りたいとむずがる娘を連れてそこ

に辿り着くまで、さして時間はかからなかった。ますます勢いを増す雨と風に娘は怯えたように母親のワンピースの袖をしつかり掴んでいる。眠たそうにしていた目は公園に着く頃にはすっかり覚めていた。

「お母さん」

公園の噴水前に来たところで少女は小さく母親を呼んだ。

「どこに行くの？」

出かけることが嬉しくて、娘は肝心の目的を聞き漏らしていた。得体の知れない不安が少女の胸を押し潰そうとする。なぜだかよく見知ったはずの母親の顔がまるで知らない人のもののように感じた。

お母さんともう一度彼女は呼ぶ。

母親は娘ではなくもつと遠く、真っ直ぐ前を見据えている。少女は掴んでいた手を離れた。

一步、二歩と後退り、距離を置く。

そこでやっと母親は娘がいたことに気がついたようだった。苦笑して、怖がる娘を呼び寄せる。娘はいつもと何ら変わらない様子に安心して手を繋いだ。

「お墓なの」

母親は娘の傘を畳んでやりながら寂しそうに顔で言った。ここはお墓だと。大切な人のお墓だと、母親は遠い目をしていとおしそうに微笑した。そして娘を自分の傘の下へ引き寄せる。

娘は誰の、とは訊かなかった。その人の名は生まれたときから今に至るまで耳にタコができるほど聞かされている。レイ・アイビス。母親の英雄である。母親の、この国の英雄であり、唯一の恋人娘の父親だ。

この公園の全てが彼の墓なのだ。面積にして街の三分の一が墓ということになる。ここは彼の生まれた町、そしてこの街で彼は死んだ。娘の誕生を見る前に、レイは殺されてしまった。

親子はやがて大きな墓石の前に辿り着いた。見上げて更にも上を

いく高さだ。母親の身の丈は平均的に見て高いとは言えなかったが、街一番の大男と墓石を比べてもやはり、石のほうがその倍も大きかった。口が達者な役者が言うには街の端の端から見ても墓石の天辺が見えるらしいが、誰もその言葉を疑わないほどの存在感がある。

明日はレイの命日だ。親子の目的は彼の墓参りだった。明日にはたとえ雨であろうと大勢の人がこの墓石の前を訪れる。国中の人間が一同に会すといっても過言ではないのだ。その波にもまれるのは母親にとって幼い娘と一緒にでは一苦労だ。

それに、墓参りは今日でなくてはならなかった。

世間一般には明日だが、事実としては今日が本当の命日だ。

娘はポカンと顎が外れたように墓石を見上げている。母親は毎年子どもたちを連れてここを訪れていたが、末の子はいつも背中に負われて気持ち良さそうに寝ていたから墓を知らないのも無理はなかった。

他の三人の子はというと歩みの遅い末っ子を待ちきれずに先に公園に行ってしまった。墓石の周りに親子とは他の気配はない。三人ともどこかで遊んでいるのだろうと母親は小さな溜息をついた。長男がついているから遠くへは行っていないはずだ。しかし、いや、と母親は考え直す。長男がいるからこそ近くにはいないという可能性もある。いつもアヒルの子のように次男も三男も長男についているから、三人一緒にいるのは間違いないだろう。

三男は年に似合わず冷静すぎるところがある。他の二人が無茶しようとするれば止めるくらいの分別はあるだろうと母親は大して心配していなかった。

ただし、彼はあの中では発言力が弱い。その上どこか厭世的で怠惰な性格をしているのだ。自分さえ安全地帯にいれば二人の兄を平気で見捨てる。はたまた、三男は娘とそう年も離れていないから、経験の少なさゆえに気づかないうちに騒動の渦中に巻き込まれていることもある。母親から見てもよくわからない子どもだ。

対して次男は単純明解だ。嫌いなものは嫌い。好きなものは好き。

好き嫌いがはっきりしていて潔いかぎりだ。彼が一番子どもらしい。長男はというとまさしく父親である。寛容で義理堅い。不条理なことや真つ当ではないことが大嫌いだと既に末娘と同じくらいるときには公言していた。しかもそれを有言実行する。いい息子を持ったと近所では有名なのだ。母親にとって自慢である。

長男は弟たちにとって父親の代わりのようなものだから、命令されたら大抵のことは聞いてしまう。三人とも頭はいいが馬鹿だ。長男でさえ親の立場から見ればまだ子どもの域を出ない。やんちゃの盛りなのだ。時には悪戯が過ぎて怒られるくらいの年頃だ。数式は解けるが常識がない。父親は頭も弱かった。それに比べたらマシだと思えるほど母親は達観している。そもそも常識は後から付け足すものであるからして若いうちは放っておけばいい。そのうち痛い目を見れば自分から知るだろうと、母親は樂觀的だった。

ふと、彼女は紙袋を抱え直す。ガラスとガラスがぶつかったような力子という音がした。

その音が聞こえたのだろうか、娘はきよとんとした目で母親を見上げる。

「お兄ちゃん、いないね」

そうねとぼんやりとした口調で母は答えた。能面のような声だった。

「お母さん？」

やはり母親はいつもと違っていた。

自我さえもはっきりとしない娘にその違和感の正体を判別することはできない。見上げた顔は人形のような、仮面のような表情に見えた。背中を這い上がるのは本能からの恐怖だ。離れようと少女は思った。今日のお母さんはおかしい。

一步 傘の下から足が出た。

ワンピースに雨粒がどんどん吸い込まれていく。新しい長靴の中に水が入りこんで、気持ち悪い。

「どうしたの？」

そう微笑んだ母親の目は大きくて　娘を見ているようできて、  
本当はその先の何かを見ていた。目だけが、笑っていなかった。

少女にはそれが泥酔した父親を前にしたときのような危機感にも  
似て更に危ないものと対峙していると感じ取ることができた。

そして娘は乾ききった唇を僅かに震わせて、聞いてはいけな  
いとを訊いてしまう。

「お父さんは生きてるのに、なんでお墓参りなんてするの？　お父  
さん、なんで二人もいるの」

「死んだのよ。あなたのお父さんは死んだ」

言いながら母親は紙袋の中から四角い花瓶を出す。立方体で花が  
大きいときに安定して生けるための、家にあつた花瓶でも特に重い  
ものだ。母親は常々その花瓶には触らないようにと子どもたちに言  
い含めていた。

今までとは致命的な何かが変容したのを敏感に感じ取った少女は  
はっと息を呑む。

「死んだの」

母親はもう一度、今度は自分に言い聞かせるように言った。「わ  
たしの夫はレイ・アイビス……それでいいじゃないの」

ねえ？と小首を傾げる仕草をする母親。ズツ、と下がった足が水  
溜まりの窪みにとられて娘は派手に尻餅をついた。

びしょ濡れになったまま彼女は少しでも母親から距離をとろうと  
土を掻く。しかしワンピースの襟を容赦なく引っ張られ、花瓶を持  
った女の前になすすべもなく這いつくばった。

「父親がいらないせいで寂しい思いをしたでしょう？　やっぱり家族  
はみんな一緒にいないと駄目ね」

しゃっくりを上げた娘に向けた母親の声はどこまでも優しかった。  
お父さんのところへ行きましょう。

嫌だと娘は泣く。

掲げた花瓶はまっすぐに娘に向かう。

少女はもう二度と開かないくらいきつく目をつむり、歯を食いし



ばって顔を背けた。

しかし 花瓶はいつになっても少女には当たらなかつた。うっすらと薄目を開ける。初めに目に入ったのは大きな靴だつた。ぱつと視線を上げる。

そこにあつたのは母親ともみ合う長男の背中だつた。振り下ろされるはずだつた花瓶を取り合っている。彼は少女を振り返って叫んだ。

「逃げる！」

その声でやつと身体に力が入つた。跳ね起きて二人と距離をとる。

「おにい」

言いかけて、少女の視界にちょうど母親の顔が入つた。

思わず悲鳴を上げそうになるのを喉の奥に閉じこめる。目は血走り、振り乱した髪は雨水を吸って般若のようだ。母の変わり果てた姿に心臓を捕われ、足がすくんで動けない。

石のように立ちすくむうちにゴンツという重い音と共に兄は頭を花瓶で撲られ、妹の見ている前で地に倒れ伏した。少女はただ声を上げることすらできず母親を凝視した。

悪魔だ。

こみ上げてきた名も知らぬ激情に頭がくらくらした。雨は女と娘の距離さえくらませる。急に強ばっていた肩の力が抜けた。

絵本で見た悪魔は口が裂けて髪は汚ならしく濡れていて、四肢は嘘みたいに細かつた。性格は意地が悪くて傲慢。

足元は雨と混じつた兄の血で染まっっていく。

もういいと、少女は思った。

もうやめる。

嘘つきの悪魔の女と、酒を呑んで殴るばかりの男から産まれたから 悪魔も悪魔の子も悪いから、死んだほうがいいから もう、やめる。

少女は静かに目を閉じる。

三男が大人びているならば、この兄妹は下にいくにつれて早熟だ

った。

しかしまたも母親を遮る者があつた。母親の腹を抱えるようにして横から少年が飛びかかる。

二番目の兄だつた。見れば女の足首を血まみれの長男が掴んでいる。暴れる女を二人の兄が必死で抑えこんでいた。

目が合つた一番上の兄は妹に行けと言う。首を横に振りそうになるのを抑えて、少女は踵を返した。足の動きは固い。それでも死に物狂いで走つた。

遠く背後から断末魔のような叫びが聞こえる。兄か母親かもわからなかつた。その声が消えたとき、少女は肘をグイと強く引かれた。ギヤツと蛙を潰すような声が出る。

母だと思つたとその姿を目にするのが怖くて、相手を見ないままにめちゃくちやに両手を振り回す。だがその手首さえも押さえこまれてしまった。荒い息づかいを顔の近くで感じる。恐る恐る目を開けると、それは母ではなかつた。

「おにいちゃん」

そこには三人目の兄の顔があつた。

長いまつげが間近でしばたたく。

「大丈夫？」

その言葉が終わらないうちに妹は目の前の兄に抱きついた。

兄もびしょ濡れだつた。それ以上に冷えた身体をした妹を、彼は一度だけきつく、宥めるように抱きしめる。

「行くよ、サチ」

時間がないんだと彼は言った。二人の兄が殺されてしまつたら、次は自分たちの番だ。

頷くより他にできることはなかつた。

手を引かれながら少女は嗚咽を殺す。

三人の兄は妹を守ること必死だつた。

泣いたら駄目だと、妹はひたすら走つた。心を、殺した。

彼女の兄は一度だけ妹を振り返る。

「家には、帰らないよ」

少女は無感動に顔を上げる。

帰れない。彼はそう言っつて、妹の手をきつく握りしめる。

「二人きりで生きるんだ」

妹は静かに、目を閉じた。

母は父親の暴力のせいで心が壊れてしまっていた。いつかは決定的な亀裂が表れることを、どこかでわかっていた。

母親は英雄の存在を抛り所にしたのだ。これ以上、自分が壊れてしまわぬように。もう取り返しのないところまでできていたのに、感情は手放したはずなのに、兄と妹は涙が止まらなかった。身体が渴れてしまいうくらい、喉が悲しみに嗄れてしまいうくらい、涙を流し続けた。

涙はやがて渴れる。喉は声を通さなくなった。だが雨だけはいつまでも、止んでくれなかった。

街の外れまで来て、泥にまみれた足は動かなくなった。

路地の物陰に身を隠し、兄は寒さで震える妹を抱きしめる。彼自身も歯が噛み合わずにカチカチと鳴る。兄妹は縮こまるように強く抱き合った。

「サチ」

口から白い息を吐きながら彼は妹を呼ぶ。大丈夫と彼は言ったのだ。本当は不安で仕方ないはずなのに、妹に柔らかく微笑んだ。何も心配することはないよ。ずっと一緒にいるから、もう泣かないで。その言葉で、妹は帰る場所がないことを悟った。

頷いた妹の頭を彼は優しく撫でる。

えらい、えらい。

額を兄の肩にすり寄せる。

本当に世界で二人きりなんだと思った。広い世界のうちで誰も助けてくれなかった。彼女を助けようとしてくれたのは唯一、彼女の兄たちだけだった。

蜘蛛の糸にすぎるように妹は兄だけを頼る。世界中で信じられる

のは一人だけだった。

ふいに妹は兄の綺麗な茶色の髪に手を伸ばす。

「えらい、えらい」

兄は開きかけた口を閉じた。代わりにぎゅっと、腕の中の大切なものを抱く。まるで失いたくないと訴えるように。

妹はまた、いつものように静かに目を閉じる。

次に目が覚めたとき、少女が笑うことは二度となかった。

## 論理が覆り、

シフの街は綿織物で栄えている都市である。

半世紀ほど前は鉱山から銀がとれるということでも有名だったが、現在そこからの収益は皆無だ。街中を掘り尽くして、出てくるのはただの石ばかり。観光地としてもあまりに面白くない街だった。銀山から大方の銀を掘り出したシフが次に目をつけたのが綿というわけだ。鉱山の街から綿の街へ転向してまだ日は浅いが、それでもシフが産業の中心であることには間違いない。街の裏通りでも朝早くから働く人々がひっきりなしに往来していた。

その日の早朝に舞い降りた粉雪は柔らかな日射しに溶けて路地を濡らしている。僅かに反射した光にその若い少将は目を細めた。

漆黒の闇のような色をした軍服に身を包み、剣の柄に軽く手を添えて道端に佇む。足早に目の前を過ぎていく人の波を難儀だともいっようなうに眺め、何をするわけでもなく退屈そうに大きな欠伸を繰り返していた。涙目になってはいたが、それでも視線は鋭い。その容姿は不思議なほど人に安堵を抱かせた。適度に日焼けした肌は健康的だ。胸元で光る白銀色をした雛菊の勲章は彼の階級を示している。全体的に黒で統一された外見で唯一、髪だけはカラメル色をしている。

彼がいる通りは狭く、馬車がすれ違えるほどの幅しかない。短く刈り込んだ髪にはあちこちに寝癖があつた。剣からは手を離さず、もう片方の手でそれを撫でつける。その際にも小さく欠伸が出た。肌寒いには変わらないが太陽が出ていないときよりは麗らかな陽気である。春の気配を肌で感じて、彼は無意識のうちに微笑みのようなものを浮かべた。

忙しく通りを歩き交わす人々はそんな彼に苦笑いのようなものを向ける。少将は（気まぐれだろうが）、通行人たちに暢気に、ヒラヒラと手を振った。若い女たちは顔を赤らめて軽く会釈していく。彼

の柔らかい雰囲気を引き寄せられる女は多いのだ。年増の女たちでさえ夫はそっちのけで手を振る。ただの男が相手ならば殴りかかられてもおかしくない。しかし傍にいる夫たちは相手が少将だと知ると肩をすくめて、逆に申し訳なさそうに会釈を返した。

少将は異性から人気があるわりに恋人は生まれてから今までに一人もいないと公言している。それは有名な話だ。女たちも遠くから見つめるだけで自分から話しかけることはない。つくる気も予定もないというのは建前で、隠れて本命がいるのだというのが大方の予想だ。大半の女は少将の隠れた恋人に勝てる気もしなければ、略奪愛に走ろうにもどうしても心のどこかが引き止める。そういう醜いものに巻きこみたくないという母性本能のようなものが働くのだ。同性から見れば単なる嫌なやつだが、彼にはそれを安易に言わせない空気を持っている。

完璧なおつちよこちよい、と彼をよく知る者は言う。能力も、仕事に関しては全てが完璧なのどこか抜けているというのだ。最近寝れないんだと、ある日彼は仕事仲間に行ったことがある。寝れなくて困っていると。いつになく真剣に、目の下に真っ黒なくままでつくった顔で言うものだから、少将の部下たちは一様に訳を知りたがった。恨みを買うような人間でもなしにマイペースすぎる彼が他人に助けを求めることは滅多にない。寝不足の理由には抜き差しならぬ事情があるのだろうと周囲は少将の次の言葉を待った。

鼠が……。

俯いて小さく呟くように言った言葉を最後まで聞き取れた者はいなかった。もう一度、渦中の彼は今度は先ほどよりは大きな声で言う。鼠がうるさくて眠れないんだ。一瞬動きを止めた部下たちは、次の瞬間には清掃用具を手に入れるために走った。そして思い思いに武装して少将のアパートに雪崩れこんだ。人が生活するのがほぼ不可能だと推測できる荒れ果てた部屋を目撃して、軍内部では唯一部屋の主を怒ることができるとある部下は「ゴミ捨てもできんのか！」と怒鳴った。いつもは綺麗だと少将は反論した。

「あいつがないから……」

そして、だから汚くなったと言いつつのように付け足した。黙々と部屋を片付けていた面々

やはり恋人がいたのかと思う前に少将が完璧人間でなかったことに驚いたという。

そんな経緯をつい最近に経た人であるから、彼の周りには専ら部下が五、六人付き添っていた。しかし今日の彼は一人だった。もう一度雪が降らないものだろうか、ぼやあと空を見上げている。彼の期待に反して天候が崩れる気配は全くなく、むしろ雲一つなく晴れ渡っている。残念、と心中で呟いた時だった。

人波から「あつ」という聞き慣れた声が出た。その方向から小柄な軍人が転がり出る。小さいけれど筋肉質で、その目つきには一切の隙がない。猛禽類のような目をしていて、付き添い第一号である。

「よつ」と、少将は手を上げて笑う。

それを見て、中佐の彼は身の丈にも勝る気迫で気楽な少将に近寄り、他人には真似できない俊敏な動きで敬礼をした。

「少将！」

「ん？」

意外と声は響いた。少将は思わず首をすくめた人々に苦笑いで軽く頭を下げる。恥ずかしさで顔を赤くした中佐は半ば、自棄になって続ける。

「今すぐ支部に戻ってください。例の容疑者が捕まりました」

「ん……容疑者？」少将は困ったような悪戯っ子のような顔をした。「ジノ中佐。そういうのは普通、道端で言っちゃ駄目だ。誰が聞いているかわからない。訓練生の頃に習ったはずだ」

声をひそめてはいたが、その響きにはからかうような含みがあった。顔をさらに真っ赤にして拳を握る彼に、少将は「まだまだだなあ」と素直に呟いた。

悔しげに俯く彼を、そうとは知らないかのように少将は微笑む。感情に流されやすいのがこの部下の欠点でもあり上官が好むところで

もあつた。

そろそろ時間を潰すのにも飽きた少将は猫のような伸びをする。手を一瞬だけ空を掴むように動かした。当然掌には何も残らない。残念とまた、彼は今度は口に出して呟いた。

「サチ、だっけ？ その女の子」

シフ支部の屋根に掲げられた軍旗が視界に入るようになった頃、ぽつりと少将は訊いた。母親殺し。兄弟殺し。罪名を頭の中で反芻する。少将の空のはずの胃が疼いた。

「女の子って言っても十年以上前の事件ですから、それなりの年です。たしか……十四、ですかね」

おいしい、と少将は言う。

「十五だ。一月前が誕生日だった」

樂しげな少将を呆れたような目でジノは見つめる。

「知ってるなら訊かないでください」

カカと少将は笑う。

「ジノくんがちゃんと資料を読んでいるかの確認。たまに読み込んでこないやつがいるんだよね」

それは駄目だ。少将は言う。冤罪を生む可能性が高いからね、と。

少将はいつもの飄々としたそれより真剣に見えた。

ジノ中佐は思わず息を飲む。

少将はすぐにいつもの柔らかい微笑みを浮かべた。

背格好、年、性別、罪状、過去の目撃情報。それらを頭に叩き込まずして犯人を捕まえることはできない。そう少将は念押しする。親殺しは、重罪なのだ。殺人のなかでも特に重い罪として罰せられる。殺しの罪人には絞首刑か斬首の道しかない。しかし親殺しの罪人は車裂きの刑だ。左右の手足をそれぞれ馬車にくくりつけ 裂くのだ。身体を縦に。その死体は市中を引きずり回され、烏に啄まれるままに放置される。他国はいざ知らず、この国ではその刑が厳格に執行される。平等権が隣国では憲法で認められているために、殺人はどんな間柄の人間を殺害したとしても絞首刑のみである。しかし



この国　ヒリでは階級制も年功序列制も古くから根強く、格差も明確なのだ。

その制度のもとではまず軍が中核である。大将をはじめとした将官、次に佐官、最も下に尉官。少将は現在のヒリには二人だけである。将官の末席である少将が暇などということは決してないのだが、最高位の大将が容認しているために誰も強くは言えないのだ。

視察だと少将はうぶく。街の、国の平和を守るのが軍の仕事。まずは体感してみないとわからない。まったくの詭弁をすました顔で平然というものだから、大将は容認しているというより諦めているのだ。少将は仕事はできる。それにこうして抜け出すのも年にほぼ一回だけだ。他の軍人とは違い、この少将は休日もなく四六時中軍部で動き回っている。勤務時間は彼が誰よりも多いのだ。不満が出ないのはそのためである。

今回少将がシフを訪れたのは上から命じられたからである。件の殺人犯のシフでの目撃情報がつい先日匿名で寄せられたのだ。

「なんで殺人事件一つで少将が動くんですか」

シフへの付き添いを命じられた若き中佐は得心がいかないと口を尖らせる。俺は政治が苦手だからなと少将は笑った。

「難しそうなものは他の、得意なやつがやればいい。俺は実行部隊だ」

「でも少将はもっと大きな事件のために動くべきです」  
大きな事件。

繰り返した少将は唇を歪めた。

「殺人は重罪だ。それを大きいだとか小さいだとか言うのは間違っている」

中佐は思わずグツと詰まる。俯いたジノ中佐の肩に少将は溜息混じりに腕を回して体重をかけた。その手で、慰めるように彼の頭を軽く叩く。

「全国指名手配の殺人犯に会った、しっかりしろ。軍人らしく背筋伸ばしてけ」

いいな？と聞かれた中佐は「はい！」と敬礼した。  
少将は笑う。  
役には立たない部下だが、声量だけは軍一である。

## 反抗すると、

僅か四歳で母親と兄三人を殺害した少女の罪は瞬く間に国内外に広まった。

ある者は世も末かと絶望し、ある者は背筋に寒気を覚えた。どちらにしろ、幼女の殺人犯というのは世の国民に激しい戦慄を与えたのだ。当初は目撃情報が軍当局へと多く寄せられたが、ほとんどがガセか信じるに足りないものだった。

通報の中には少なからず少女と一緒に少年がいたという言があった。それは少女と最も年が近い兄ではないかと。しかし真偽のわからない情報に振り回された捜査本部は結局、サチが兄を三人とも殺害したと結論づけた。もちろん、幼い少女が四人も殺したとは軍も民衆も初めは信じていなかった。しかし犯人と有力視されていた父親はその日のその時間帯に酒場で酔って大暴れし、何人かに怪我をさせた傷害罪で投獄されていた。容疑者の少女は逃げている。いたい何から。なぜ。その問いから安易に出た結果に民衆は踊らされた。捜査本部は全国に指名手配犯として少女の名前と身体的特徴を手配書にして貼り出した。犯人なら犯人で問題ない。そうでないならば重要参考人として聴取するまでだ。そう軍上層部は決定づけた。「きみ、ジゼリスの出身でしょ」

その少女を見て、開口一番に少将は言った。

それまでは口を閉ざしていた彼女がジゼリスという単語に反応する。狭い取調室では容疑者の他に少将とジノ中佐しかいない。少将は少女の正面に机を挟んで椅子に座り、その一步後ろに立つ中佐は緊張しているのか顔が強張っている。

つい先程逮捕されたという少女は不安げに視線をあちこちに走らせている。青みがかった灰色の虹彩に人形のような印象を受けた。少女の、炭のように真っ黒な長い毛は少し乱れている。手首には高そうな薄ら青い石の腕輪があった。

中佐の顔が見えない少将はもう一度「ジゼリス？」と訊く。少女が頷くと少将はどこか嬉しそうに「そうかそうか」と何度も頷いた。訳がわからない中佐はその横顔を怪訝そうに見る。その視線に気付いているのかいないのか、少将は少女に優しく微笑んだ。

少女は戸惑ったように、意志を伝えようと手振りで訴える。しかし少将は掌を顔の前へ出して待つように言った。そして「キギリ！」と、ここまで案内してきた支部長を呼ぶ。

弾かれたようにすぐに取調室のドアが開いた。

顔を覗かせたキギリ支部長に中佐は呆れた。つい先程ドアの前で別れるときに、誰も近寄るなど少将が言ったばかりであった。つまり盗み聞きしていたのだ。

おどおどと肉団子のような身体を丸めて入ってきた彼に、

「こそこそ聞くくらいなら同席しておけ」

一変して少将は厳しく言い、少女に向き直るときにはもう柔らかい表情に戻っていた。

「きみは犯人じゃない。巻きこまれただけだ」

断定するような言い方に傍らの二人はぎょっとした。

思わず反論するために口を開きかけた支部長を少将は目で黙らせる。少女はきよんとしていた。まるで、少将の言葉がわからないようだ。

少女の様子に中佐は首を捻る。ジゼリスとは海を渡った異国の名前である。公用語はこことは違う。だから少女がもしジゼリスの人間なら言語が通じないのは当たり前だ。しかし犯人である少女がこの国の言葉を喋れないのは辻褄が合わない。

言いかけて躊躇した中佐の言葉を少将が代わりに言った。

「人違いだ。犯人はこの国の出身者。残念だったな、キギリ」

興味を失ったかのように少将は立ち去ろうとする。少女などには構いもせず、取調室から出ていった少将を一瞬固まったキギリは必死で追いつがった。

「いや、しかしですね……」

「言い訳はいい。そもそも犯人の毛の色は茶色だ。おまえ資料を読  
んでないだろ」

上着を、と中佐は少将に差し出した。外は寒い。

上官に付き添いながら、少将はまるで外の空気のようにだと中佐は  
心の端で考える。雪を作り出す冷たい空気のように、突き放すよう  
な冷たさがあった。

シフ支部の玄関を出る直前、少将は肩を落とす支部長を振り返り、  
初めてまともに見た。

「あの腕輪はジゼリスでしか採れない石　しかも富裕層しか買え  
ないくらい高価な種類の鉱石からできてる。あの子はかなり裕福な  
商人の娘だろう。早く釈放して謝罪しに行ったほうがいい」

どこへと訊かれ、少将は帰るとだけ告げた。その背中を中佐は追  
う。上官の足取りはいつになく速かった。

中佐にはその背中が理由もなく怖い。世界に取り残されたような  
気分になるのだ。やっとの思いで追いつくと、少将は中佐を見て「  
ああ……」と思いついたように呟いた。

「すまん」

「今、完全に忘れてましたよね」

「ああ。悪かった」

少将は謝罪の言葉しか口にしなかった。

しばらく沈黙で道なりに歩いていく。少将の帰るとは、軍本部の  
ある首都へ戻るといふことなのだろうが、歩きで帰るとすると多く  
とも一週間かかる。行きはもちろん馬車で来た。

何やら渋い顔をして考えこんでいる少将に話しかける勇気がない  
中佐はその半歩後ろをおとなしくついていく。街の外れの寂れた鉱  
山地帯まで来て、少将ははたと気付いて立ち止まった。中佐を振り  
返る。

「すまん」

「わかつてます」

中佐にもなんとなくわかってきた。少将は少しマイペースすぎる。

中佐は少将の隣に並ぶ。上官は少し困ったような顔で微笑んだ。

「ここで馬車をつかまえるのは無理だよな」

そうですなと中佐は生真面目に答える。

「あ、少将」

掠れるような声で中佐は少将を呼ぶ。雪ですと言われ空を見上げると粉雪が舞い降りてきていた。

少将は口から白い息を吐く。溜息のようだった。

中佐は背の高い少将を見上げる。

「帰ろう、ジノ中佐」

少将は嬉しそだった。

「首都まで乗せてくれる馬車を探してきます」

「待て」

駆け出しかけた中佐を少将は止めた。その目は悪戯っ子のように茶目つ気を含んでいる。いつもの少将だと中佐は安堵した。

「向こうから来てくれたらしい」

その視線の先には、軍有の印である鈴蘭の彫りがされた馬車が人が走る何倍もの速さで近づいてきていた。

その扉には大きく鈴蘭の彫刻があり、二頭の馬を操るのは大柄な青年だ。軍服を着ている。一見すると熊が馬に鞭打っているように見えた。一文字に閉じられた口は寡黙そうだ。睨むような鋭い目付きは初めて会う者ならば一瞬動きを止めてしまう。

「少将」

「ん？」

中佐は呆れた顔をしていた。

「ルイス大佐は御者ではありません」

「ん。でもルイス、暇そうだったから朝、出かける前に頼んだ。」

頼んだことをすっかり忘れていたらしい。

「暇そうに見えても駄目です。そういうのは大佐の下である自分に言ってください」

馬車が少将の前に止まる。見下ろされた中佐は気まずそうに目を

逸らせた。それを見て、少将は諫めるように大佐を見た。

馬が鼻を鳴らす。中佐は馬にまで馬鹿にされているような心地がした。

「大佐。手綱は自分が……」

ルイス大佐はジノ中佐を一瞥して、綱を手渡した。そして慇懃な態度で馬車の戸を開ける。しまったと中佐が思ったときにはもう遅い。少将の苦笑いが目に焼きつく。大佐は馬車に乗り込み、後ろ手に扉を閉めた。

顔を真っ赤にして馬を逸らせる。

中佐は寒さで赤くなつた鼻をこする。口から出た溜息が、ぼわと浮かんで、すぐにかき消えた。

## 鶏と笑われた

馬車の中では少将が目を逸らせて俯いていた。向かいに座る部下の膝を見ている。大佐は腕組みをして少将から視線を外さない。

チラと顔を上げ、大佐を見る。すぐに伏せた。

「ロキ」

ルイスは少将を呼んだ。

「……………」

「話を聞くときは顔を上げる」

「…………… ルイス大佐」

何を怒ってるんですかという少将の質問に、ルイスは片方の眉を上げた。

「わかつてて訊いているなら殴るぞ」

「ごめん」

大佐は軍服の襟を立てる。どこか諦観したようにロキ少将が視線をさ迷わせるのを見ている。ロキ、ともう一度ルイスは呼んだ。

「どうだった？」

「…………… 違った。サチじゃなかった」

そうか、とルイスは疲れたように背もたれに体重をかける。

内と外の温度差で小窓が汗をかいている。狭い馬車の中で逃げ場がないロキは、もそもそとポケットを探る。沈黙を埋めるために彼が手渡したのは、一枚の写真だった。

「サチの。一番最近の写真」

写っているのは一文字に口を結んだ少女の横顔だ。背景はぼやけている。

感情が一切感じられないその表情をルイスは哀れみを含んだ、泣きそうな顔で見つめる。生き別れた娘と再会する親のようなそれだ。

ロキは正面の彼から目を逸らす。

「あいつも一緒にいるみたいだ。男といたという情報が相当数ある。



最後に目撃されたのがシフだから、たぶん近くにいると思う」

ロキの言葉を聞いていているのかいないのか、ルイスは生返事を返す。少将は諦めたように小さく溜息をついて、窓枠に人差し指を這わせた。

指先を窓ガラスに線を書いていた水滴が伝う。目を閉じると、車輪の音に混じって雪が降る音が聞こえる気がした。

「軍の誰かに捕まるより先に、見つけ出さなきゃな……」

ルイスの呟きをロキは鼻で笑う。

「いちおう佐官でしょ、ルイス大佐」

ルイスはむっとした顔をする。

「軍人である前に一人の兄貴だ。妹を守る義務がある」

罪人であるサチを妹と呼ぶルイスに、やはりロキはどこか見下した視線を向けていた。表情と声だけはにこやかだ。

「じゃあ、おれは弟のほうでいいや。あいつのほうが手間かからなくっていい」

そう言って、少将は楽しそうに笑った。

それを、目が笑っていないとルイスは睨む。なぜだか少将のその笑い方が気に入らなくて仕方がない。

癖だと少将が言い訳めいたことを言うのは目に見えている。ルイスは何も言わなかった。代わりに少将の頭に手を伸ばし、摘まんだ一束を軽く引つ張って、「長くないか？」と訊いた。少将は子どものように口を尖らせる。

「あのさ、おれ、もう二十五だから。あんたの世話になるような年じゃない」

どこか芝居じみた仕草で、さりげなさを装って手を払う。その手を何を言うでもなく擦る大佐に、気まずい彼はまた窓に顔を寄せた。窓に映る滲んだ自分の顔が、いつもと変わらない緩んだものであることに心の内で辟易しながら、先ほど写真を出した所から四つ折りにした紙を取り出す。一番上の段には彼の唯一の兄の名前が記されている。

ルイス・ギリエルラ・サクベージ。

二段目以降に次男、三男、長女と続く。

次男はロキ・ガリダ・サクベージ。この国で二人しかいない少将のうちの一人である。要領よく這い上がった彼は今や四つ年上の兄よりも社会的地位は上だ。

三男、スズ。長女、サチ。

犯罪者の妹と、彼女と共に逃亡中の弟を持つ彼らは、あの雨の日に死んだとされた兄弟だ。

軍は真実を公開していない。死体は母親のものしかなかったのだ。

サチ 母親殺し及び兄殺しの凶悪犯。妹が潔白なのは彼らが一番よく知っている。母親を殺したのは妹ではない。ましてや三男でもない。長男と、次男だ。

「スズ・ハリア・サクベージ。サチ・リユクリア・サクベージ。

捕まったら死刑。それはもう決定事項だ」

罪もない二人が逃げている理由はそこにある。初めは母親から逃げ、捕まったら弁解の余地なく死刑と知っているから逃げている。

この国は衰退している。だから権力を誇示するために凶悪な犯罪者を捕えることに必死になっている。罪の有無に関わらず。

スズとサチは守るよ。

母親に止めを差した次男は、表情を消して言った。加害者の家族に対する扱いは容易に想像できる。だから言った言葉だった。どうやってとも不可能だとも、世界を知っている兄は言わなかった。ただ、頷いた。

しかし現実には妹が槍玉に上げられた。より幼く、より凶悪なほうが広告として相応しいというわけだ。

だったら、とロキは言う。衰えた軍制度を利用する、と。

まだ三十にも満たない年齢の彼が少将になっているという事実が、年功序列制が有名無実だということを証明している。

高い地位にいれば下を見渡しやすい。上にいくため、人の殺し方も兵の使い方も、何から何まで自分のものにした。全ては可愛い妹

と小憎たらしい弟のため。

外では、踏んだらサクサクと音がしそうな雪が舞っている。ルイスはふと目を閉じて膝の上の手を握りこむ。それを横目で見て、ロキはマツチで紙に火をつけた。焼ける匂いに驚いて目を開けた兄を、ロキは笑う。手の中のそれはすぐに跡形もなく燃え尽きた。

「いくつも戸籍抄本の写しがあるもんだから探すの大変だった。これが最後の一枚だ」

兄貴、今度昇進試験でしょと彼は言う。「おれの場合は裏口使ったからよかつたけど、今回はそうもいかないから」

「だから盗んだのか？」

ルイスは眉をひそめた。

「それもあるけど、今後のために」

もし、とロキは言う。

「もしおれたちより先に軍が捕まえるなんてことがあったら、どうする？ それでも助けようって思う？」

当たり前だと言いかけたルイスは唇を震わせ、やがて黙りこむ。

ロキは優しく微笑んでいた。

「おれは今持つているものに執着はないから、何を失ってもかまわない。でも、兄貴には家族があるから」

だから、捨てられない。

ルイスはふと気がついたように顔を上げた。

「だから軍に入るときも兄弟って言わなかったのか……！？」

ロキは口の端で笑う。肯定の意味だった。脱力したように腰かける兄は頭を抱える。

孤児が入隊するとき、身分を証明するものはなくていい。特に戦争孤児だと申し出れば入隊か保護かを選べるのだ。おかしいと思っていたのだ。血の繋がりを隠す理由がないのに頑なに拒む弟を。単にそういう年頃なのだと思いきこんでいた。

弟の目的は守るものをつくらないこと。恋人をつくらないのも、ルイスとの関わりを隠すのも、そのためだ。

「まあ、もし最悪の展開になっても兄貴は黙って見ててよ。あの子らの兄弟だと知らなければ、少将の立場を降ろされることはないだろうし　利用できるものは何でも利用して、ギリギリ止めてみせるから」

まるで、少年のように晴れやかに少将は笑った。

情けなさに頭を垂れたルイスの肩を叩く。

「大丈夫。兄貴よりおれのほうが何倍も下準備してあるから。失敗なんかしないよ」

それが兄のプライドを傷つけるのだと重々知りながら、ロキは慰めを口にする。

半ば八つ当たりだった。しばらくして、ごめんと彼は言う。当たる相手が違うことはわかっていた。

「次はちゃんと、見つけるから」

「すまない」

謝らなければならないのは自分だと気づきながら、ロキは窓の外に意識を移した。真っ白な景色は目に染みる。

吐き気がするほどの純白なんて、どす黒くなるまで踏み潰してやりたい。

「ルイス　」

「あ？」

兄は眠たそうな目をしていた。

「……雪。綺麗だね」

「ああ」

ルイスは曖昧な返答を返した。

ロキは自嘲気味に唇を歪める。

雪は

綺麗すぎる雪は　大嫌いだ。

欲しいのは、（前書き）

改稿、といいますが、第五部に第六部を結合させました。というところで、後半部分にかなり付け足しをしています。手前勝手でございますが、ご了承ください。

欲しいのは、

風が唸る。まるで威嚇するみたく。

何がそんなに腹立たしいのか気象士ではない彼には見当もつかないが、とりあえず家にいたほうが無難だと珈琲を飲みながら肩をすくめた。同じ屋根の下で暮らす彼女はそれを見て不満そうに唇を尖らせる。

「花」

声のした方を見ると、彼女は今にも泣き出しそうだった。墨を流したように長く艶やかな髪の毛の女性である。日の光に触れたことのない肢体は病人のように青白い。彼はカップをテーブルの上に置き、窓際に置かれた椅子に座る彼女の横に寄り添う。窓の向こうではどす黒い曇天がいくつも渦を描いている。

「外の花。飛んじゃうかもしれない」

「かもな。 どうする？」

「どうって……」

すぐるように見上げてくる彼女に彼は優しく微笑んだ。

「家の中に入れようか。世話はきみが見ればいい」

「でも」

「大丈夫。ちゃんと鉢植えに入れるから」

彼女の心配はそこではないのだろう。更に何か言いたげに口が開いた。その唇に、彼は人差し指を軽く当てる。彼女の頬は一拳に赤く染まった。

「待ってて」

と、空の鉢植えとシャベルを持って彼は出ていった。

その後ろ姿を、唇にそつと触れ、彼女は仄かに頬を赤くして見つめる。じわじわと押し上げられるような胸の泡立ちに全身が総毛立つように感じた。人知れず、その口元には抑えきれない喜色を称えた笑みが浮かぶ。彼女は恋をしているのであった。

並の恋ではない、と彼女自身は思っている。運命なのだ。赤い糸で繋がれた、余所から見れば限りなく陳腐な《運命》だ。運命とは。縁とは。何も知らない無邪気な彼女は生まれて初めての恋に浮き立っていた。

わたしのために雨の中、花を採ってきてくれる。

それは両想いということになるまいか。

足が動かないわたしのために、毎朝変わらず笑顔で来てくれる。

それを恋人と世間では言うのではないか。

彼が仕事としてここに来てのことさえも彼女の《恋》の前では大して問題にならなかった。

わたしに会うためにそれらしい理由をつけているの。

その一言で完結することだった。恋は凶器で、その源泉たる愛は狂気だ。彼女のような乙女はそれすらも知らない。知らずに、まるで玉璽のごとく振りかざす。とはいえ悪意のない極めて純粹な感情であることには変わりない。たとえそれが凶器の形をとっていたとしても、それは彼女にしてみれば全く身に覚えのない暴力なのである。

重いだけの愛に　彼は興味がないことを彼女は知らない。

夢ばかり見ている彼女と彼とでは、まさに真逆と断言していいほどの決定的な違いがある。彼女が現実を憶えないことには彼の視界にすら入らない。

無知は恥ずべきことではない。誰もが通った道だ。しかし、無知に甘んじて努力をしようとする者には潰されても文句を言う権利はない。彼女は彼のことを知ろうとしない。

彼が何かしてくれるだろう。彼が何もかもやってくれる。そんな女を彼は必要としない。

ああ、幸せだわ。

そんなことを思つて殻に閉じ籠る。

カゴの鳥は憐れだ。だが、自力で生きていけるくせに開いた扉を前にしてカゴの中に留まり続けるのは、ただの怠惰だ。餌を与えて

ちょうどいい。そうしないとわたし、死んじゃうわ。

彼は、そういう人間に興味はない。

死んでしまえとか。甘えるなとか。そう言って、純粋な笑顔を見せるのだ。

彼女の言った花とは、植えたわけでもない雑草の類いだ。少し紫がかつた小さな花である。

こんなものどこがいいんだか、と彼は思う。しかし彼女が望むなら出来る限りのことはしよう。しなければ、と思う。

灰色のカツパを羽織り、ザクザクと花の周りにシャベルを入れる。隙間なく生えているものだから相当の数の花が潰れて地面に食い込んだ。

一番綺麗な部分だけを鉢植えに移し、トントンと側面を叩く。すっぽりとちょうどよく嵌まった。それに満足して、彼　スズは少し微笑んだ。

彼女の座る位置から花が咲いている所は見えない。たまに彼が摘んでくる小さな花を見知っているだけだ。無惨に踏み固められた花畑のことなど想像すらしていないだろう。そのあたり、見かけ通りの世間知らずである。

降り始めた雨が頬を叩く。叱咤するような風を鬱陶しいと言いたげに、眉をひそめた。

彼は全体的に色素が薄い。髪は淡いクリーム色で、色白の肌は陶磁器のようだ。綺麗に整った容姿は母親似である。

小雨の中では少し周りが見えにくい。スズは片方の腕で鉢を抱え、もう片方の手で額に張り付いた前髪を払った。手を退けた拍子に、前方に見えたものに眉をひそめる。

視線の先には、一人の少女がいた。



傘も持たず、真っ直ぐに長い髪は雨にしとすと濡れている。彼女はスズを視界に入れると、花のように晴れやかに微笑んだ。鉢植えの中の花よりも数倍も綺麗に。偽物の笑顔だと知っているのに、スズは花なんかより何十倍も綺麗だと思った。

「……なにしてんの？」

心とは裏腹にスズはそう冷たく突き放す。その隣を通りすぎようとする。少女はついてきた。

「見つけたよ」

背後で少女は呟いた。

「そうか」

「今から本人に会ってくるけど、一緒に行く？」

「いや、やめとく」

スズは足早に歩いていってしまふ。少女は不満げに目を細めた。

「お兄ちゃん」

そう呼ばれた彼はぴたりと立ち止まる。振り向くことはない。しかし、耳だけは少女の声が雨の音でかき消されぬようそば立てた。

「もう離れていいよ。これ以上、あの人からは聞き出せない」

「……わかった」

そう言つて 彼は持っていたシャベルを手離れた。それは派手に水を散らして地面に落ちた。振り返り、ニツ、と彼は笑う。

「お疲れ、サチ。それならおれも英雄とやらに会いに行くよ」

少女 サチは頷き、一瞬だけスズの帰りを待つあの女性の家を見た。

この位置からは互いに見える距離だ。満面で微笑む少女とその兄を彼女が何と思ったか、サチには容易に想像できる。

現実に裏切られるのは 少なくとも本人が裏切られたと思うかぎりでは それは、身を切られるより辛い。

サチの考えていることなど露知らず、先程までとはうって変わりスズは優しく妹の手を引いた。

「この花ほしい？」

サチは冷やややかな目で鉢植えの花を見下す。多少の嫉妬が含まれていた。

「いらぬ。こんな汚い花　虫の餌にもならないわ」

そっか　、すました顔で兄はそう返事をした。

力を抜いた腕から小さな鉢植えが滑り落ちる。地面に墜落したそれは、あつという間に砕けた。

「行こう。もうここには用がない」

スズはサチに着ていたカツパを譲る。自分が濡れることもいとわない。互いに手と手を固く握る。

スズは満足げにため息をつく。

「あの人は？　挨拶していかなくていいの？」

サチの言うあの人は、あの足の不自由な女性のことである。スズは介護人としてあの家にいた。

名残惜しくないのかと暗に聞かれているのだった。スズは面倒の一言でその疑いを切って捨てる。

「他にもあの人の世話を見てくれる人はいる。今がちょうど潮時だ」日に日に熱を増す視線には耐え難いものがあつた。

世間知らずな彼女に、なにくれと気配りのきくスズは運良く現れた王子のように見えたのかもしれない。しかし彼にとってはあくまでも仕事としての範囲だ。他意はない。むしろ迷惑だとスズは思う。

サチは訊いたくせに興味がなさそうな顔をして、少し目線の高いスズから視線を外す。

「おれにはサチの隣が合うみたいだ」

それを聞いて、

「そう……？　それならそれで、別にいいよ」

サチはわざとらしい溜息を溢した。スズは密かに笑った。

「ねえ、サチ。兄貴に　ルイスとロキに会いたいと思わない？」

俺、あの二人の居場所知ってるよ。俺たちのこと搜してる」

サチは一瞬だけ目を見開いた。

そして　それだけだった。何も言わず、ただ無意識のうちで握

る手に力を込める。スズはその手を握り返す。

「サチ……ごめんね？」

サチはがぶりを振る。

張りついた無表情はピクリとも動かない。スズは自分の不注意に内心大きな舌打ちをして、頭上高く続く真っ黒の空を見つめた。

「雪だったら、よかつたのに」

ポツリと呟いた言葉に、隣で黙りこくる妹は小さく頷いた。

たとえば。

もし降り注ぐのが雨なんかじゃなく真っ白な雪だったなら　純  
白で汚れない、綺麗で可憐な雪だったのなら　それなら。

それならまだ、こんな気持ちにならないで良かったのかもしれない。  
い。

サチは足元に咲く花を故意に踏み潰す。ぐちゃぐちゃの花弁を後ろに、彼女は嘲笑った。

花なんて全部、　なくなってしまうばいいんだ。

スズは泣きそうな目でサチを見つめる。それに気づいているの  
かないのか、サチは無理にでも綺麗を装おって微笑む。

「綺麗なものは必ず、最後に私を裏切るの　」

それはサチの母も日頃から口癖のように言っていたことだ。

綺麗な女は、汚いんだ。

汚い。汚い汚い汚い。でも雪は違う。雪は綺麗なまま。裏も  
表もなく裏切らない。雨より雪のほうが、サチは好きだ。手の届か  
ないもののほうが好きになれる。

汚いものは、綺麗なものに憧れる。だから　サチはスズを手離  
せない。

「英雄さんは、どうなんだろう。いい人かな、それとも悪い人かな」  
サチは呟いた。

「英雄なんてのは大体、変なやつだよ。人から外れてるから英雄に

なれるんだ」

「天才と変人は紙一重？」

「そう。他人から理解されて認められなければ変人にされる」  
使い古された言い回しをスズはなぞった。

「英雄さんは、もう一度英雄になつてくれるかな……」

「そうじゃなきゃ困る」

スズはそう言つて、再び空を見上げる。

雨が止んでいた。風に飛ばされてきた葉がサチの頬にまとわりつく。その葉を摘み取ったスズはぎよつとしたようにサチの顔を覗き込んだ。

「サチ……」

「今度こそ本物だといいね」

妹の頬を擦る。

「泣くなよ」

頬を伝う水滴は雨のようでも、涙のように見えた。妹が素の感情を表にすることはない。それだけは確実だ。サチの体現するものは全てが嘘。しかしスズには虚構の裏の本音が透けて見える。

お兄ちゃんは私のもの。

だから、いなくなつたりしたら一生つらむから。

今も昔もサチはそれしか考えていない。

「お兄ちゃん」

「ん？」

「お腹痛い」

「……………」

「吐きそう」

サチはその場にうづくまる。

「どうした？ 変なもの食べたのか？」

サチはふるふると首を振る。唇を噛みしめ、すぐるようにスズを見上げる。まさかという予想はあった。

「副作用。意外に、早かつたね」

サチは額に玉の汗をかきながら戸惑う兄にふわりと笑いかけた。スズには成す術もなく、ひたすらその背中を擦り続けるしかない。荒い息をして、咳き込み始めた小さな身体を抱きしめた。

「ごめん……気がつかなかった。医者の所に行こう。別の、弱い薬をもらってこよう。副作用がないやつ。英雄の所へはまた今度……」

サチは首を振った。「いや」

「いやっておまえ……」

「早く行かなきゃ逃げられちゃう」

「逃げないよ」

結果的に逃がしてしまったことはあるけれど。

サチはスズの腕を掴む。

「大丈夫」

「何が」

妹はただ大丈夫とだけ繰り返した。

サチはそれが堪らなく悔しい。幼い妹を苦しめている病に、自分は何もできない。何もしてあげられない。たった一人の妹なのに。

「サチ」

「英雄がいなきゃ……、何もかもを清算しないと、ロキにもルイスにも会えない。休むのは全部が終わった後」

サチは笑う。

「大丈夫だよ、お兄ちゃん」

サチは笑う。

「私は強いから」

サチは笑った。

スズは。

「そうだな」

スズには頷くことしか許されない。

どこか遠くから泣き声が聞こえる。

あんなふうに泣いて頼みこめたらどんなにいいだろう。

スズは泣きたくなった。

やめてくれ、もうやめてくれって。

悲しいのは苦しいからやめてくれ。

もう楽をしよう。

過去を捨てよう。

でも心の中には、サチの笑顔がある。

それを捨てることはできないとだと知りながら、スズはまた、深く冷たいため息をついた。

欲しいのは、（後書き）

書いていて何となく違和感を感じていました。書いた本人にさえわかる違和感は読んでくださった方には何となくではなく、はつきりと明確に感じ取れるらしいです。申し訳ありませんが、これが今の精一杯です。どうかご容赦を。

## 変態ではなく

クルブはシフの東に接した街である。シフに比べ活気はなく、いたって穏やかで簡素だ。突出した産業があるわけでもなく、もっぱら宿泊地としての役割を担っている。

売り買いするならシフ。

泊まるならクルブ。

それは旅行者や商人にとって常識である。他の観光都市のように温泉が出るわけではないが、細やかな気遣いが日雇いに至るまで徹底されている。

シフにも宿はあるが、サービスはあまり良くない。おまけに宿泊客を狙った強盗も容易に入り込むくらい緩い防犯意識のため、愛想はないが屈強でよく働く門番が多いクルブに泊まるというのが通例だ。

雪の降り積もるある日、クルブの街に一組の旅人が入った。

深緑色のコートを身にまとった彼らは、溢れ返る人の群れにもみくちゃにされながら宿屋を目指した。

クルブは宿の街。むしろ宿屋が見つからない通りがないくらいだ。どれも一級である。微妙な良し悪しで選ぶより、いち早く空いている部屋を見つけるほうが賢いやり方だ。

だが、それはこの街に慣れていない旅人に限った話。微妙な差異の中でも自分の気に入った宿は旅人なら誰しも一つは持っている。

旅 というより、流浪して八年になる彼らは当然のこと、一路自分たちの宿を目指す。

宿への連絡は事前にいつている。

さらに込み合った通りに入ったところで、旅人の一人が頭一つ小さい片割れに周りを気にしながら耳打ちした。

「ここで爆竹を鳴らしたら警羅とか来るかな」

「ばか」



片割れは鼻を鳴らした。

しょうもないことを。

彼は万一にももう一人がふざけたことをしないようにと、きつくねめつけた。

大きいほうの彼の考えを小さな彼はお見通しだ。爆竹で驚かせて道が歩きやすくならないかなとか、そんなくだらないことを考えているのだ。そんなことをしたらむしろ混乱でますます歩きにくくなることがわからないのだろうか。

わざとらしく肩を竦め、これみがよしにため息をつく。　いや、それが狙いなのだ。

「……わかつてるよね。兄貴」

「はいはい」

目立つことは絶対にしないように。

大きいほう　弟の意図を読むと、兄の大きな目はぐるりと一周した。

真面目に聞かないなら打つよ、と目を眇めた弟に、アメやるから怒るなよと笑う。毎度のこととはいえ、弟は少しげんなりしたようだ。

「なあ」

メインストリートから外れ、路地に入ってしばらくして。

兄は後ろに立つ弟ではなく、そのまた後ろ　この街に入ってからずつとつけてきていた存在に、このとき初めて声をかけた。

振り向く間もなくソレは逃げの姿勢を取った。

「あ」

思わず漏れた声は弟のものだ。決して低くはない宿屋の屋根に飛び移る。茶色の残像が見えた。

「逃げたね」

先程、間の抜けた声を出したことを隠すように、弟は呟く。

「逃がすかよ！　って言ったほうがカッコ良い？」

兄は相変わらずにやけている。

「……カツコ良いかはともかくとして、メリハリは出るだろうし、物語も多少は進むよ」

だよなあと笑った兄はこれっぽっちも逃げたアレを追う気はないようだった。

「アルも可哀想に」

弟はひとりごちる。アルは兄の勇姿を聞くことが大好きなのだ。語るのと同様に。それで旅費を稼いでいるのだから少しくらい分前があってもいいように思うときもないではないが。

とりあえず宿に行くかと歩き出した兄の背中を追いつつ、弟はまた深いため息をついた。

変態ではなく(後書き)

受験が終わったわけではありませんが、何となく9時に一時勉強を切り上げ、3つ書いてみました。文章力は以前より、よりいっそう落ちていきます。大目に見てください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7346/>

---

ennui

2011年11月15日21時17分発行